

オスカー・グラーフ ツェツィーリエ・グラーフ・プファフ
編著『日本の妖怪』

シュトゥットガルト、1925年（4）翻訳

安 松 みゆき

自然を徹底して研究することによって研ぎ澄まされた観察力は、ある種のユーモアを生み出した。老いた巨匠北斎が、いたずらっぽく細めた目で、描く対象を鋭く観察する姿が思い浮かぶ。北斎の天狗は、無邪気で人間味にあふれた曲芸師の姿で描かれていたり（図53）、あるいは山の住処を離れて人間の享楽に興味があるかのようであり、北斎はおそらく、楽しそうにほくそ笑みながら、天狗の姿に筆を走らせたのであろう。

我々のかたわらを過ぎ行くものは、本来、人間が自らを自然のなかに位置づけ、自然との内的な関係を築くために作り出した表現にすぎない。それによって、永遠に変転する外面の可視的な姿ではなく、永遠に不変なものが探求されているのである。

このように森羅万象のなかに置かれた人間は、自分の永遠の生や自我の不滅を求め、限界のあるものよりも永遠を、誰しもが望む至福の来世を探し求める。人間にとってただ信仰のみが、暗黒の深遠から抜け出す橋なのである。あらゆる信仰の形態と、あらゆる民族が、それぞれの方法でこの橋を架けた。

すでに最も古い信仰形態、とくにここで取り上げる中国の信仰に、このような靈魂の存続が知られている。故人の靈魂は現世の親族とともに存在し、親族と苦楽を共にし、善きにつけ悪しきにつけ、親族の運命に深く関わっている。それゆえに彼らは、供物によって良好な関係を保たなければならない。祖先を偲ぶのは、ただ畏敬の念だけでなく、実利的な必要に基づいていた。

そのことは、以前に引用した詩経 Shi-king の美しい古詩の一つに、最も明確に次のように表現されている。：

菩提寺での大規模な供物儀式

気品と礼儀に満ちて、我々は細やかに、
秋と冬の供物のために、牡牛や牡羊を手に入れる。
皮をはぎ、小さく解体して、
整えて、運ぶ。
祈祷者が室内に入り、供物を捧げる。

神々しく供物を清め、
そして壮大に祖先を静める；
靈魂の一群は
敬虔な子孫の繁栄を喜ぶ。
靈魂たちは子孫の命が永遠であるように、
祝福する。

竈では、最も密接なやりとりが見られる。
そこで人々の強い願望を熱したり、あぶったりする。
高尚な婦人が静かに現れて、
そしてそれらを深皿に盛った。
そのまわりの異邦人たちは、
あちらこちらで酒を酌み交わす。
慣習に沿って死者を供養する。
笑い会話することは礼儀にかなっている。
靈魂は慈悲深く行動し、
そして1万年も、またそれ以上も
祝福を与えることで報いる。

我々が相当に憔悴したとしても、
慣習においてやり残すことがなければ、
思慮深い祈祷者に知らせが届き、
その祈祷者は敬虔な子孫に次のことを知らせる。
「賢者には敬虔な供物は甘く匂う；
靈魂は酒や食事を享受する。
靈魂は、汝の望みと振舞に合わせて幸福に包まれるように
取り計らう。
汝は熱意にあふれ、道を外れていない。
汝の行動は正しく、思慮深く配慮がある。
靈魂は汝に途方もなく価値のある
最も高価なものを贈る」

各慣習が時間を追ってすすめられる。
それを鐘と太鼓が一斉に鳴って促す。
敬虔な子孫は玉座に向かった。
そこで思慮深い祈祷者に知らせが届く
「靈魂のやつらは酒にあきあきしている」

そこで死んだ子どもが立ち上がる。
太鼓と鐘がなってかれは外に引き出され、
慈悲深い靈魂たちを家に引き入れる。
大勢の従者や女たちは、
すべてをためらわずに外に持ち出す。
叔父と兄弟たちは
特別の饗宴で一体となる。

供物をそなえる親族のいない死者の魂は落ち着かず、空腹や咽の渇きによって苦しみが
ながら、許されることもなく、あらゆるところを憎しみに充ちて彷徨う。そのような魂を諫
めるために、中国では「寄る辺のない魂」という寺院を建立した。

仏教は、やすらぎのない魂に、地獄の中でも餓鬼地獄で苦しめられた魂の姿を加えた。
つまり Pretas, 日本では餓鬼と言う。かれらの口には針穴ほどの大きさの穴がある。餓
鬼は様々な姿に変わり、人間に敵意を抱き続けている。輪廻という仏教の教えによって、
幽霊の存在に対する観念の輪のなかで更なる要素が生み出される。日本のあらゆる幽霊や
化け物の姿は、このようなイメージに遡る。またすでに現存する土着のイメージや地方の
伝説などによって、さらに豊かなものとなる。

昔から特別に愛され、あるいは知られてきた歴史的人物がいるが、かれらの魂は、不当
な苦痛を受け、あるいは非運のために死後も安らぎを見出せなかったと信じられてきてお
り、そうした魂をめぐる幽霊の話がある。

ここで、いわゆる幽霊と化け物の姿や形から、改めて次のように三つのグループに分け
ることができる。まず既に述べたような、史実に基づく「歴史的に定まった」幽霊。第二
のグループは、地方の言い伝えから生じたものであり、詩的につくりかえられ、あるいは
純粋にロマン的な性格を持つ場合であり、例えば馬琴の例が挙げられる。第三のグループ
は、一般的な幽霊である。あちらこちらに見られ、特異な自然現象から生じたもので、例
えば雪女という雪の幽霊などである。

注目されるのは、中世美術において、いや徳川時代 Tokugawazeit まで、幽霊の表現に
一度も出会わないことである。画家の応挙 Okyo が、はじめて幽霊を描いた人物と言われ
ている。かれは当時の将軍 Shogun の注文で幽霊を描いた。その際、応挙は、死に行く叔
母の下絵も描いていた。

幽霊は、まるで本物のように描かれたため、絵から飛び出して肝をつぶした画家の前で
宙に浮いた、と言われている。芳年 Yoshitoshi の木版画がこの決定的な瞬間を描いてい
る（図138）。

昔の幽霊の言い伝えのひとつに、歌人で政治家であった菅原道真 Sugawara Michizane
の話がある。道真は、かれの優れた才能を宮廷の誰もが認めたほど、当時あってはまれ
な存在だった。その道真は、藤原氏 Fujiwara の私欲の企てを牽制する宇多天皇
Udatenno を、全身全霊で支えていた。藤原氏は常に天皇の権力の弱体化を目論んでいた

からである。宇多天皇は道真を当然最も心強い重臣と見做し、個人的な友人としても優遇した。

道真はむしろ理想の人物であり、彼がまだ自由の身だった時は、歴史に没頭しつつその時代の優れた歌人の一人でもあった、と歴史的な作品には記されている。

宇多天皇は、息子の醍醐 Daigo が有利になるように王位を放棄したとき、道真は右大臣に就いた。しかしその時、藤原時平 Fujiwara Tokihira が左大臣であった。道真が兩天皇から信頼を得ていたことは、藤原を支持する者たちに、ますます道真に反感を抱かせ、また時平からは最も辛辣なねたみを買うことになった。藤原時平は、道真が自分の兄弟を王位に就かせるために、天皇に対して反乱を企てている、と道真を中傷した。醍醐天皇 Daigotenno は、かれの父親のような明晰な目を持ち合わせていなかったため、道真を筑紫 Tsukushi に追放した。上皇はこの知らせを聞きつけ、醍醐天皇にこの処分を取り下げるように忠告するため、すぐに御所に駆けつけた。上皇は、御所の門が閉ざされていることに気付いた。そして藤原一族が、上皇が参内できないように待機していた。

時平 Tokihira は、確実に事をすすめたかったのであり、追放者の背後に殺陣師を送っていた。その殺陣師とは、厳格な侍の梅王 Umeo である。道真が兄弟とともに、この殺陣師の前に現れると、道真の忠実な御供の一人が、この浅ましい者を殺害した。

追放の際に、唯一のなぐさめとなったのは、道真が天拝山 Tempai-zan を登ったことであった。そこからは、はるかかなたに京都が眺められたからであった。京都は道真が愛したすべてがある場所であり、そのために苦しんだ場所でもあった。思いもかけない追放によって、道真は孤独に山の頂上に登り、天皇のために祈りを捧げたのであった。

郷愁にひたり、道真は花咲く庭で、その花が道真が丹念に育てたものであり、道真の最も純粋な喜びだったことを思って、短い詩をつくった。

東風吹かば
思いおこせよ
梅の花
主なしとて
春を忘るな

心優しい説話が伝えているのは、善良な神は、歌人がしばしば眺めた樹木を、かれが追放された場所へもたらし、そして道真は、彼の貧しい家から一歩外に出たとき、その道真の愛する木の花が、扉の前で見事に咲きそろったのを目にした、という内容である。

しかし、心の苦しみは、かれの活力をすばやく消耗させた。そして秋の夜に次のように嘆いた。

「顔は黄色く老化し、全身は腫れ物で化膿している。
生きる力も消え失せた。

途方もなく遠く離れたところに
私は左遷された。
栄光と華やかさのなかで、かつて私は生きていた。
豪華な身なりで —
いま私は追放され
みすばらしく惨めな囚われの身である。
鏡のような輝きを月は放つ。
だが、その月も私の無実までを晴らしてはくれない。
剣のように鋭く風が身を切る。
そして私の苦しみを軽くすることはない。
身震いしながら耳にしたことは、
私の苦しみと悲しみを増大させた。
ああ、秋よ。お前は、私にだけ悲しい秋とするのか。』

しかし道真を追放することで、藤原氏を満足させることにはならなかった。かれらは菅原一族を潰したかったのである。それは当時の良き習わしだったからである。

道真の息子の管秀才 Kanshusai は、京都あたりの小さな村に住んでいた源蔵 Genzo のところで教育を受けた。時平はその少年を殺し、その証として少年の首を持ち帰るために、侍を2人、げんば Gemba と、殺された梅王 Umeo の兄弟である松王 Matsuo を送った。松王は、道真によって養育された三人兄弟のひとりであり、以前からの主人であり恩人に忠誠を尽くした。彼は、同じ年代の息子を犠牲にし、そしてその息子の首を、自らの手で時平に差し出したのであった。

道真は追放からわずか2年後の903年に亡くなった。彼の憤怒した魂は、落ち着きを見出すことができなかった。そして道真が死に行く中で生涯に互る敵たちに向けられた呪いが、おそらくかかり始めたのであった。

道真の敵だった者の多くはまもなく急死し、何人かの耳からは小さな蛇がはい出てきた。蛇は死者を罰する使者と呼ばれた。皇太子も死神の手に落ちた。死んだ大臣は黄泉の国から戻り、冥府の王、閻魔天 Emmaten は、道真の事件をもう一度調べようとした。

そこで王は、道真の追放の知らせを焼き捨てて、彼の子供たちを呼び戻した。そして改めてあらゆる役職につけた。だが、ある晩に、まだ恨みを持つ道真は、天皇のところに現れると、天皇はこの日重い病に陥った。

そこで神社が建立され、道真を天満天神 Temman Tenjin として、文筆と学問の神として奉ったのである。

ある説話では、さらに神々が道真に雷神に変貌する力を与えた。この姿に変身した道真は、一番恨んだ時平と清貴 Kyotura の前に、恐ろしい稲妻の中から現れると、閃光の稲妻が走り、かれらに落雷が落ちた、と伝えている。

北斎は、この場面を木版画で、大胆でドラマティックな構成を用いて描いている（図

21)。

藤原氏は権力者となったが、北条家 Hojo 一族からひとりの敵があらわれ、数年の間に藤原氏を権力の座から引きずりおろした。

平清盛 Taira no Kiyomori は優れた人物で描かれているが、彼は目的のために物欲にものを言わせ、想像を超えるほど残酷で暴力的であった。そのような性格は、望みの高い目論みをかなえるには重要だったのである。数十年の間かれは日本を支配し、天皇も手中に納めて天皇を退位させ、自らの判断で支配者として名乗った。

清盛は平家一族を絶頂期へといざなったが、限りのない支配欲からまもなく破滅に向かった。晩年に清盛は重い病気に苦しめられた。次々と欲深い企てによって駆り立てられていた清盛は、ある朝、庭の美しい冬景色から鋭気を養おうとした。すると藪のなかから髑髏が清盛を凝視していた。清盛は視線を曲がった松の木のほうに移したが、髑髏はうつろな目でかれを見つめた。髑髏は細い木々にも現われたのだ。数限りなく！清盛の残忍さと信じがたいほどの支配欲の犠牲となった者たちと同じ無数の数で。

清盛が苦しめた源頼朝と、かれの勇敢な弟の義経に運命が向いたときに清盛は亡くなった。かれは最後に常磐 Tokiwa の美しい目を思い出したのだろうか。いや、かれは死に際に、供養のときに頼朝の切られた首を墓に供えるというおぞましい遺言を言い残した。

多くの芸術家たちはこのテーマを扱ったが、だれも広重 (図16) のように、この不気味な幻想を歪曲せず、芸術的に風景画と一致させたものはいない。また暴君の姿は表現豊かに描かれており、一般に風景画家と見做されている広重が、装飾的なものを同様に修得していたことを示している。

老いた狼のような清盛が亡くなるやいなや、1181年に清盛の息子のなかで最も勇敢な知盛 Tomomori によって坂倉 Sakakura で打たれた源氏と藤原氏とが、新しい軍勢を集めた。近江 Omi では源義仲 Minamoto Yoshinaka が、今や平家の大將となった平宗盛 Taira Munemori に勝利し、宗盛は慌てて京都に逃げ帰った。しかし京都でも宗盛は身の安全を感じることができず、平家一族を集結して南方に逃亡することを決心した。一族はこの弱気な企てに異を唱えたが、宗盛は都での自堕落な生活を送り、防衛戦について何も知らずとはしなかった。かれは当時8歳になった安徳天皇 Kaiser Antoku と、その母である建礼門院 Kenrei-mon-in、そして他の親王たちを奪取して急いで逃亡した。その際に家来や支持者たちにも天皇に追従するように命じた。

源氏側の不和は一時的に平家側にゆとりを与え、一の谷 Ichi-no-tani において強力な砦を整えた。そこで若い義経は、天狗 Tengu の下で修業していたことを示した。範頼 Noriyori と力を合わせて、かれは2方向から攻めて完全な勝利を収めた。

宗盛は一度もそれを食い止める術を見出せなかった。最終的に彼は平家のあらゆる力を巨大な船隊の上に結集し、壇ノ浦 Dan-no-ura (現在の下関 Shimonoseki からほど遠くない) の湾に引き返した。義経の船隊はずっと小さなものだったが、そこで大胆な攻撃をすすめ、憶病者の宗盛は少しずつ後退した。300艘は裏切って戦いをやめた、とされる。両者とも恐ろしいほど激しく戦い合ったが、悲運は平家にもたらされた。

勇ましい知盛は、平家の一群を失ったことを知り、天皇一家の船を出した。かれは皆に、もはや何の希望もないことを伝えなければならなかった。

清盛の未亡人で天皇の祖母にあたる二位尼 Nii-no-ama は、皆を呼び出した。もはや名誉以外何も残っていないこの最後の時に、彼女は宗盛の逃亡に強く侮辱を感じて、皆に対して口を開き、宗盛が自分と清盛の息子ではなく、すりかえられた職人の子供であったことを話し始めた。第一子の長男の誕生後、生まれたのは娘だったので、清盛は、家督相続が十分安心できるのものではないと不安にかき立てられた。娘にかわり、娘と同じ時に生まれた職人の子供を第二子の息子として育てたのであった。「本当の平家一族ならば、宗盛のように己の名前を戦いによって汚すことはなかっただろう。」

指揮官たちは、深々と二位尼とまだ幼い天皇の前にひれ伏して、最後の戦いへとすばやく戻っていった。最後の時が来たとき、知盛は重い錨を体に結び付けて、波間に消えていった。他の勇者たちも同じように命を捨てていった。

（続く）



図16 歌川広重
《平清盛と死の庭園
（現在「平清盛福原にて怪を見る図」）》



図21 葛飾北斎
《道真の亡霊が敵を復讐する図》



図138 大蘇芳年
《画家応挙と息を吹き返した
応挙の幽霊（現在「応挙の幽霊」）》



図53 葛飾北斎
《天狗の曲芸（『北斎漫画十二篇』部分より）》